

黒田龍之助著「その他の外国語 - 役に立たない語学のはなし - 」

現代書館 2005年3月25日刊を読む

語学は発音がすべて、音読がすべて - ロシア語学校M -

1. (1)わたしがロシア語を学んだところは、大学だけでもあっちこっちあるけれど、基本を身につけたのはどこかはっきりしている。東京は代々木にあるロシア語学校Mである。
- (2)はじめてMの門を叩いたのは、いまから 20 年以上も前のこと。それまでもロシア語は勉強していたのだが、ある人に薦められてMで勉強しようと決めた。Mは小さな学校で、駅前の雑居ビルに 2 室を間借りし、そこが教室である。自習室とか図書室なんてない。前の授業が終わるまで、みんな廊下で教科書を読んでいる。隣は雀荘だった。
- (3)クラスはレベルによっていくつかに分かれているが、まずは入門コースに入る。あとで知ったのだが、大学のロシア語学科やロシア文学科を卒業した人でも、この入門コースからやり直しという場合が珍しくない。その理由は極めて明快。つまり、発音が悪いのだ。
- (4)Mでは発音がすべてである。授業では教科書の例文をひたすら音読する。クラスには通常 5 ~ 6 人の受講生がいるが、90 分の授業のうち、3 分の 2 はテープのあとについて一人ひとりが順番に発音する。このときに先生から発音を厳しく直される。一つひとつの音だけでなく、アクセントの強さやイントネーションまで含めて、一つの文を何度も読み直すよういわれる。一度でハラショーといわれることは滅多にない。
- (5)文法はとくに教えない。教科書には文法説明もロシア語に対する和訳もすべて書いてある。質問があればできるが、ここでは別のことに時間を使ったほうがいいことを、みんな分かっている。
- (6)この作業が終わったら、簡単な単語テストをして、こんどは教科書を閉じる。さきほど苦労して読んだテキストと同じ文がテープで流れ、それを口頭和訳する。そのあとにこんどは先生が同じ文の日本語を読み上げるので、それをロシア語にしていける。訳すというのではない。毎回、教科書の指定範囲をきちんと暗唱しているかをチェックするのである。なんでもかんでもすべて暗唱というのが、このMでの発音に続くキーワードだ。
- (7)これだけだと、なんだか単調でしかも厳しい授業に思われるかもしれない。確かに厳しい。

かつての英語学習書ベストセラーである中津燎子『なんで英語やるの』(文春文庫)並みの厳しさだ。

2.(1)受講生は社会人が多い。いい忘れたがわたしは当時まだ高校3年生であり、そういう人たちといっしょに勉強するのが物珍しかった。仕事を終えた人が疲れているのに外国語を懸命に学んでいる姿は、真剣そのもので、高校のクラスメートたちとはまったく違っていた。

(2)設備はとくになにもない。テープレコーダーがあるくらい。どうみても新しくない長テーブルが、先生を囲むようにコの字形に並べてある。お互いの顔が見えるので、会話練習だけでなく、クラスメートの表情もよく分かる。その教室も新しくない。錆びついて開かない窓がいくつかある。閉まらないよりマシか。外は建物が密集しており、窓を開けても隣のビルの壁がそびえているだけ。雨が降るとそれが複雑に反響し合い、テーブルの音がよく聞こえない。聞き取り練習のときは困った。でもそれがなんだか可笑しくて、ワクワクした。

(3)高校3年なのに受験もほったらかしてロシア語に熱中していたのだが、夏休み前にはさすがに大学受験に向けて勉強しなければと考え、先生にしばらく休みますと告げた。先生は「分かりました。でも受験が終わったらすぐに戻っていらっしやい」

(4)翌年の春、ありがたいことに都内の私立大学に合格した。合格発表を見てから、家に電話をしてこれを知らせ、そこからまっすぐに代々木のMに向かった。大学が決まったことを先生に報告すると

「では明日からいらっしやい」

ということになり、それからMでの本格的なロシア語学習が始まった。以来5年以上ここに通ってロシア語を学び、さらに5年以上ここで教えることになる。

3.(1)人は自分の学習方法が基本となる。わたしの基本はこのMで学んだ方式であった。発音を疎かにしないこと。文をひたすら暗唱していくこと。この2点に集約される。あとははっきりいってどうでもいい。外国語学習には設備もたいしていらぬ。いまではさまざまな語学学習器材があるのに、テープレコーダー以外はほとんど使わないで授業しているのも、こんなことに原因がありそうだ。

(2)器材だけではなかった。たとえばテスト用紙は、罫線もなにもないただのわら半紙。しかも端が黄色に変色していたりする。そこに先生の読み上げる日本語を書き取り、その行間にロシア語訳を書いていく。しかも時間がほとんどない。テストが終わる頃には手が痛くなった。

(3)そんな環境が、ものが溢れ好景気に沸く80年代にはかえって新鮮だった。クラスメート

とも仲良くなり、のちにいっしょに通訳をしたこともある。留学経験がなくてもロシア語の運用能力が身についたのは、このMのおかげである。

(4)Mはいまでも代々木にある。毎週教えることがなくなってもう10年以上になるが、それでも年に1、2回、先生から急に頼まれて臨時で授業を受け持つことがある。教室は20年前と同じ。そして生徒の真剣な表情も20年前と同じ。その真剣さがやっぱり嬉しい。

P 115 ~ 118

[コメント]

黒田龍之助先生の語学の勉強方法ほど確実に、また、着実に身につく方法はない。この代々木のロシア語学校の勉強方法はロシア語だけでなく、すべての語学学習の基本中の基本と考える。英語学習にもピタッと合う。英語を学ぶ者も教える者も黒田先生のすべての著作を座右に備え、大いに参考にしたい。そう確信を深める。

- 2010年11月1日 林 明夫記 -